

お父さんにないしょ、 おばあちゃんにないしょ

何日か前から、お父さんの車には捨てられたダンボール箱が
いっぱい入っています。

車の中からかびくさい匂いもします。

座るときも狭くて、体を縮めなければなりません。

お父さんは運転をしながら、ダンボール箱が目にはいたら車を止
めます。

そしてつかえないダンボール箱を車に乗せます。

お父さんに何があったんでしょう？

お父さんは毎晩10時になると、車で出かけて真夜中に帰ってきま
す。

ふしぎなことに、シンデレラのように12時を過ぎることはないん
です。

いったい、お父さんはまいばんどこへ出かけるのでしょうか？

私はとっても気になってしかたがありません。

今夜お父さんの車にこっそり乗って、ついて行ってみようと思いま
す。

ダンボール箱いっぱいの車の中にかくれているので、何度も何度も
せきが出そうになります。

お父さんの車はくねくねと曲がりくねった道を、長い間走りつづけ

ました。

そしてしばらくしてから、暗くて狭いろじに入りました。

ここはどこでしょう？

お父さんが車のドアを開けて

ダンボール箱を一つずつ下ろし始めました。

大変だ！

見つからちゃう、どうしよう！？

私は足をぐっとすぼめました。

そして心の中で数を数えました。

「一つ、二つ……」

「おいっ、キム・ミンジ、ここで何やってんだ？」

あー、まだ二つしか数えていないのに……

見つかってしまいました。

うす暗い庭に

ダンボール箱がきちんかつんであるのがかすかに見えます。

むこうの庭のすみには小さい部屋もあるようです。

「お父さん、ここはどこなの？」

「うん……、ここはダンボール箱を集めるおばあちゃんが住んでいるところだよ。」

「道ばたで使えなくなったダンボール箱を拾うおばあちゃんのこと？」

「ミンジ、ミンジはおばあちゃんが好きかい？」

「おばあちゃんって、私のおばあちゃんのこと？そりゃ、好きにき

まってるよ。」

「そうだよな、ミンジはおばあちゃんが好きだよな。

でもお父さんはな……、おばあちゃんが
嫌いだった。」

おばあちゃんはビニールぶくろをこしにつけて
空きびんをひろいに行ってたんだ。

近所の子供はおばあちゃんを見ると

「くずやのばばあ～くずやのばばあ～」って、しきりにからかった
ものだよ。

おばあちゃんは毎晩のごとく

「いたた、こしが痛い、はあー、疲れたよ」ってねころんでたん
だ。

お父さんはその声も聞きたくなかったんだよ。

お父さんは道でおばあちゃんに呼ばれたら、

あまりにも恥ずかしくてすぐ逃げたんだ。

それなのにおばあちゃんはお父さんの誕生日には、

くちやくちやのお金をお父さんの手に握らせてくれたんだ。

「ほら、

これで本や、

えんぴつでも買いなさい」

と言いながらね……。

うちに帰る間、お父さんは一言もしゃべりませんでした。

「お父さん、ダンボール箱を拾うおばあちゃんとはどこで
知り合ったの？」

「雨の降る夜に、リヤカーを引いて歩いているおばあちゃんを見か

けたんだ。

車はびゅんびゅんと走ってるし、おばあちゃんがとても危なっかしく見えた。それでお父さんがリヤカーを引いてあげたんだ。

おばあちゃんはありがとうって言って、手をぎゅっと握り

おこげあめ¹⁾を両手いっぱいくれたんだ。

お父さんのおばあちゃんがしてくれたようにね……」

そのときからお父さんは、道ばたでダンボール箱を見つけたら車にのせるようになったそうです。

ダンボール箱を集めるおばあちゃんに持って行ってあげるために。

「ところでお父さん、どうしてこっそり持って行ってあげるの？」

「いや、なんとなくな。」

数日後、私はまたお父さんについておばあちゃんのうちへ行きました。

「お父さん、これをつけておくと、おばあちゃんはこれから安心してリヤカーが引けるの？」

「そりゃそうだ、ずっと安全だぞ。」

お父さんは夜光の三角のひょうしきをおばあちゃんのリヤカーにしっかり結び付けました。

「お父さん、これもつけてね。」

気をつけて！おばあちゃんが運転中です。

リヤカーにつけようと思って私が作ったんです。雨が降ってもぬれないようにとビニールの服もかぶせてあげました。

1) こげめし味のあめ

とつぜん、おばあちゃんの部屋に電気がつきました。

「誰か、いるのかい？」

「おっと、ミンジ、おばあちゃんが起きたみたいだ！早く帰ろう！」

お父さんと私は手をつないでそろりそろり、でもいそぎ足で……。

「お父さん、今度来たときはおばあちゃんのリヤカーに空気入れてあげようね。」

「ミンジも見たのかい？」

「うん、お父さんも見たの？」

ワァー、私とお父さんの心がつうじました。

私はまた、お父さんについておばあちゃんのうちへ行きました。

おばあちゃんにわからないように、お父さんと私はリヤカーのタイヤに空気をシュッシュッと入れました。

暗い夜空におこげあめがキラキラと光り輝いていますよ。